

北京冬季五輪を見て

くぎ付けになるシーンが何と多かつたことか。集大成として大会に臨んだ田中友理恵選手の雄姿。その他に、私は特に二つ。金メダルが決まった平野歩夢選手に駆け寄り、祝福の抱擁をしたショーン・ホワイト選手。爽やかに王者交代を告げるかのように。かつて石打で二回開催された国際「日本オープン」に参戦していた小学生の彼を、私は現地役員として間近で見っていました。「モンスター」と言われていた少年は、当時「神様」と呼ばれた先達のテリエ・ハーコンセン選手と肩を並べる演技で、大観衆のどよめきは時代の変わり目を予感させるものでした。後に小野塚彩那さんや平野選手などの日本人選手が、世界のひのき舞台に立つ日が来ることなど想像すらできませんでした。時の流れを思いました。

もう一つは、高梨沙羅選手。五輪開会の直前に新潟日報社が素晴らしい特集記事を。中之島地区で接骨院を営まれる清水真一さんとの縁についてです。南魚沼ジャンプ少年団で指導する清水さんと旧知である父上は、小学生の高梨選手を預けられ、長期休暇中は当市で練習を重ねていたこと。選手として開眼したのは小学6年生の時、テストジャンパーで参加した塩沢のサマージャンプでの飛躍だったと。今も彼女は、毎年のようにこの大会に参加してくれています。そこに心のつながりがあったのだと改めて感じ入りました。競技役員として協力している市職員がいつも、口をそろえて言うことがあります。「自分の飛躍が終わっても、すべての競技が終わるまで絶対に椅子に座らない。撤収する役員一人ひとりに深くお辞儀し、感謝の言葉をかけてゆく。世界のトップ選手となっても」その姿に心打たれると。誰もが活躍を祈っていました。あんなに切ない現実があるうとは。再起を信じているであろう清水さんの願いを心して聞きたい。「市長、子どもが最初に飛ぶスモールサイズのシャントゥエ（ジャンプ台）が不可欠だ」と常に。連綿と続く人のつながり。そのとき限りの一喜一憂や応援ではない。私たちにできることは何か。

国際大学留学生 お国自慢コーナー ~boast of my country~

シリーズ 第107回

イラン・イスラム共和国 ニーマ ランジバー アレシュタナブさん



私の国はこんなところ

イランは古代オリエントの時代からの悠久の歴史をもつ国で、世界遺産も多く観光スポットがたくさんあります。自然が好きな人も、歴史が好きな人もイランのとりこになるでしょう。日本のように四季があり、北部の山脈地では雪山や緑豊かな森を、南部では砂漠や熱帯の気候を楽しむことができます。

イランの料理はおいしく、世界一だと思っています。長い歴史が育んださまざまな料理の種類があります。どれも主食の米やナンと一緒に食べることが多いです。



南魚沼市に住んで感じたこと

南魚沼の景色は本当にきれいです。周辺を散策しながら山々や田畑の景色を眺めていると、突然畏敬の念を抱くことがあります。まるで絵画の中にいるかのような感覚になり、南魚沼にいたということが信じられなくなるほどです。国際大学に来て以来、普光寺・毘沙門堂が好きでよく訪れています。

編集後記

「1月は行く、2月は逃げる、3月は去る」とは昔からよくいわれていることですが、月日の流れの早さを実感しています。早いもので令和3年度もあと1か月となりました。卒業や進学、就職、転職などで環境が大きく変わる人も多いと思います。一日一日を大切に過ごし、準備万端で新しい春を迎えられるとよいですね。春はすぐそこです。(Y.T)

今月の表紙

2月3日(休)、大崎保育園で節分行事の豆まきが行われました。鬼が登場すると、園児たちはその迫力に驚きながらも「鬼は外！」の大きなかけ声とともに、豆に見立てた新聞紙のボールで一生懸命に鬼を追い払いました。

市民の動き 令和4年1月末日現在 () は対前月比

○人口 54,538人 (-67) / 男 26,687人 (-39) 女 27,851人 (-28) ○世帯数 20,108戸 (-5)